

生徒自らが「考えること」重視

高校生がどんなことをどのようように学んでいるのか、その一例を紹介しましょう。

自由の森学園高校の3年生の社会科学（公民科）は政治経済を学びます。社会科学と言えば典型的な暗記科目と思われている方も多いと思いますが、本校では「考えること」を重視します。

ある授業の一幕です。賃金と社会保障との関連を考える単元ですが、「賃金はどうのようにして決められるべきか？」について考えます。担当の教師が準備した3種類の「賃金カーブ」のどれがよいと思うかを各自が小論文にまとめ、議論します。A年功序列、B能力主義・業績主義、C同一価値労働同一の三つの賃金パターンです。

もちろん、正解があるわけではありませぬ。現在もこの問題が実社会で問われ

高校生の授業

まなぶ

ているからです。それぞれの生徒が、自分の知識や経験をもとに価値判断することが求められます。

生徒たちの多くはAもしくはBを推します。Aではチームワークの問題、Bでは意欲や仕事のクオリティーが意見の根拠となります。これに対して、猛然とCを主張したのがちょっと外見が派手めの八幡美里さん。お父さんの姿を見ながら出した結論だといいます。

「日本人は働き過ぎ。長時間労働で残業代もなく、休日は少なく、家族との関わりもない。能力がない人はどうすればいいのか、格差は嫌だ。私の父は働きづめで週6日、毎日帰りが遅い。それだけ働いても給料は全く上がらない。ほとんど家にいないので、子育てや育児に関与できない。そのうち過労死するのではな

いかと心配だ。新聞で『年収が一定の金額を超えても幸せと感ずる割合は同じ』という記事を見た。お金はあり過ぎてもなさ過ぎていけない」

彼女は言います。「社会科学の授業は、みんなの考えが聞けることが楽しい。答えは一つではないと意識するようになった」「私が正しいと思っていることが他人にはそうでなかったり、その逆もあります」「面白いことに毎回必ずといっていいほど私と正反対の主張をする人もいます。そういった環境の中で日々生活しているのを改めてすごいことだと感じました」

賃金を入り口にしながら、社会や福祉のあり方を考えていきます。その後はジョン・ロックに遡って「自己所有」や「自由主義」を考える授業です。

美里さんのバッグには、美容を学ぶ学校の書類が入っていました。

（自由の森学園高校校長 鬼沢真之）